

令和6年度 アーツ前橋事業評価調書

資料 1

基本事項	事業名	リキッドスケープ 東南アジアの今を見る												
	会期	2025/9/21-12/24 82日							開館日数	82 日間				
	会場(ギャラリー)	ギャラリー(1F+地下)							実施方式	04その他				
	観覧料	一般	1,000 円			出品点数	22点							
		割引	800 円											
	担当者	南條史生、高橋由佳、出原均、井波吉太郎												
	目的	急速に経済発展と都市開発が進む東南アジア。本展は、同地域の変動する社会、文化状況を「リキッドスケープ(流動する風景)」と名付け、8ヶ国(タイ、インドネシア、カンボジア、シンガポール、アフガニスタン、パキスタン)12組の作品を4章構成で紹介しながら、多面的でとらえがたい東南アジアを見つめ直し、変化の激しい現代社会を国際的な視点で紹介する。												
	キーワード	東南アジアの現代アート、多様性、流動する社会、人新世、多元世界												
	他団体との連携(共催、協力等)	シンガポール美術館、アウラ現代藝術振興財団、100 Tonson Foundation、プロジェクト11財団												
	参加作家	ゲゲルポヨ	ウィット・ピムカンチャナボン			チトラ・サスマタ			コラクリット・アルナーノンチャイ					
ジャグガイ・シリブート		ナターシャ・トンテイ			ハーティム・アリームムターズ・カーン・チョパン									
ホー・ツニーエン		カウィータ・ヴァタナジャンクール			アリ・フロギー			ハッサン・アティ						
チャールズ・リム		メッチ・チョーレイ+メッチ・スレイラス			ナウイン・ヌートン									
関連イベント	①南條特別館長によるギャラリートーク:9/29、12/21													
	②担当学芸員による作品解説:10/14、11/17、12/21													
	③シンガポール美術館キュレーターによるオンライントーク:12/3													
① 投入(支出)・③ 結果(収入)	印刷物等	ポスター(B2)	チラシ(A4)		館内マップ	セルフガイド	リーフレット	図録						
		700 部	35,000 部					1,000 部						
	収入/支出	収入(A)	支出(B)		収支比率(A)/(B)	入館者一人当たりコスト	収入内訳							
							観覧料	助成金	他					
		予算	21,097,000 円	29,651,500 円	71.1%	2,965 円	6,600,000 円	14,497,000 円						
		決算見込	17,250,000 円	30,188,225 円	57.1%	7,487 円	2,162,000 円	15,088,000 円						
差額	-3,847,000 円	536,725 円	-14.0%	-	-4,438,000 円	591,000 円	0 円							
予算/決算	81.8%	101.8%	80.3%	252.5%	33%	104%	#DIV/0!							
② 内容・活動	〔②内容〕事業の概要	事業の概要(転記)	アーツ前橋初の外国人出展作家のみで構成した国際展。東南アジアの複雑な歴史や地理的状況から生じた現在の多源性を紹介するために、若手作家の近作や新作を中心に展示(出展作家12組中7組が1980年代以降生まれ、4組が女性、4人が日本の美術館初紹介)。既存の東南アジア現代美術では紹介されていなかった、若手作家たちの斬新な視点や想像力を紹介した。											
	〔②活動〕主な取組(手段)の結果	・広報戦略 ・新たな試み(転記)	<ul style="list-style-type: none"> ・日/英バイリンガルでプレスリリースを配信 ・若年層の利用率が高いInstagram広告を配信 ・Instagram投稿で各作家や作風を紹介 ・作家来日時にインタビューを撮影しYouTube動画として配信 ・インフルエンサー(芸能人、モデル、美術ブロガー等)の招致による情報拡散の促進 ・シンガポール美術館キュレーターを招いた日/英バイリンガルでのオンライントーク実施 											
	・メディア等広報実績 ・新たな試み 図録 関連イベント 助成 など ●指標 来館者反応 手ごたえ アンケート	広報実績[新規掲載や効果が大きかった媒体など、特別な案件]	<ul style="list-style-type: none"> ・上毛新聞、群馬テレビ等の地域媒体のほか、毎日新聞、朝日新聞、日経新聞等でも展評・紹介記事が掲載 ・美術手帖、TOKYO ART BEAT等の美術メディア、Casa BRUTUS等のカルチャーメディアでの掲載 ・館のInstagramは会期中にフォロワーが急増、Instagramリーチ数6.4万人(約20%が有料広告から)。特に外国人へのリーチが多かった。 											
③ 結果	入場者数(参考数値) 上段:人数(人) 下段:割合(%) ※色付きは有料観覧者	一般	学生	65才以上	団体	高校生以下	招待券	割引等	他	イベント	合計(人)	日平均(人)		
		2,325	192	214	70	319	538	4	370		4,032	49		
	57.7%	4.8%	5.3%	1.7%	7.9%	13.3%	0.1%	9.2%	0.0%					
	一般指標	指標	目標値		達成値	達成率	特記事項							
入場・参加者数		10,000 人		4,032 人	40.3 %									
展覧会満足度		-		83.8 %	- pt	アンケートに、「満足」、「やや満足」と記入があった割合(無回答を除く)								

令和6年度 アーツ前橋事業評価調書(2)

③ 結果	事業名	リキッドスケープ 東南アジアの今を見る			
	進捗管理 [スケジュール観]	A.概ね円滑に進んだ B.遅延気味であった(準備期間8か月と非常にタイトなスケジュールであり、英語での書類の準備等が館全体として不慣れであったため、急いだが全般的に遅れた)			
④ 成果	[④成果] 一覧表の「目標」に対する結果 ・観覧者層のターゲット ・ねらい	観覧者層のターゲット	前橋市内外のアート愛好者、20～40代		
		成果	来場者のうち、アンケート結果から推測される年代は40代が22.6%、50代が19.6%、20代が17.9%であり、市内が31.5%、県内が24.7%、県外が40.9%という結果となった。ねらい通り、県外からの来場者が最多となり、「東南アジア」という必ずしも引きの強いテーマではない中、関係者は県外から訪れてくれたのではないかと考えられる。		
		ねらい1 (転記)	東南アジアの流動性・多元性を見つめてもらう		
		成果	来場者からはポジティブ/ネガティブ両方のコメントが存在したが、その多くは「東南アジア」と聞いて想像する作品ではないものを鑑賞したことで生まれた意見(ちょっと怖い、刺激的、挑戦的)であった。日本とは異なる土着文化や西洋からの影響、さらに戦後に独自の政治体制をもって現在の発展を遂げる隣国に対して、新たな理解をもってもらう機会を提供できたのではないかと思う。		
		ねらい2 (転記)	東南アジアの若手現代アーティストを紹介する		
		成果	来館者やメディアからは、日本の美術館で初紹介となる女性作家たちへの注目が集まった。各国の地域性を出発点としながらも日本の来場者にも共感を得るテーマを持つ作品を紹介することで、現代社会に共通する問題について思いを巡らせる機会を創出できたのではないかと思う。		
		ねらい3 (転記)	アーツ前橋を世界のアートマップの中に位置づける		
成果	本展は、今年度開催された他の2企画展と比較して最多のインスタグラムリーチ数を獲得(山縣展3.7万人、荒井展5.1万人、本展6.4万人)。通常リーチ数が多いと来場者増に繋がるが、本展の場合その傾向は見られなかった。理由として、リーチした人の多くが外国人であったことがあげられる。来場者数には繋がらなかったものの、これによってアーツ前橋の国際的な認知やプレゼンスが高まったと考えられる。				
⑤ 波及効果	個別評価	<p><1～6は、記入項目の例・無い場合は削除。独自の評価項目の設定可。記入日を記載> 1参加作家のその後の活動を評価 →後日、記入</p> <p>2. アーツの事業に対して、誰がどのような価値を見出したのかを評価 →東南アジアだけではなくオーストラリア、アメリカ、ドイツ、フランスなどの美術関係者の多くが、本展が東南アジアの作品を通して現在の流動性を考える展覧会として評価したと感じる。</p> <p>3. 事業関係者(作家、運営、イベント参加者、地域住民)たちとの間で生まれた交流やその後の関係性の構築を評価 ⇒作品借用に協力してくれたシンガポール美術館や各国のギャラリー等から協力を得たことで、今後アーツ前橋が国際展を行う際に協力を依頼することができる良好な関係性を構築することができた。</p> <p>4. 事業の実施に伴う波及効果 →海外の一部の方々に、アーツ前橋及び建築とアートの街としての前橋の存在が認知された。</p> <p>5. 地域資源の活用という点での効果 ⇒本展を通して海外から前橋への注目度が高まり、実際にアーツ前橋を訪れながら街のアートスポット(前橋ギャラリー、白井屋ホテル、Maebashi works、馬場川通り、中央通りの建築群)を巡るルートが一部の外国人アート関係者に認知された。</p>			
	※記入日を()内に入れてください ※概ね1年経過毎に再確認して修正				
自己評価(担当者)	効率性 ①:③ 事業が効率的だったといえるか	1.非常に良い	2.良い	③普通	4.劣る
	合目的性 ②:④ 事業の目的を達成したといえるか	1.非常に良い	2.良い	③普通	4.劣る
	事業の将来性 ②:⑤ 館の事業に対し将来性があるか	1.非常に良い	②良い	3.普通	4.劣る
	社会的将来性 ③:⑤ 社会への影響に将来性があるか	1.非常に良い	②良い	3.普通	4.劣る
	課題・改善点	<p>・開館以来前例のない規模での国際展を実施することとなり、英語書類の準備や送金の手続きなど学芸チームだけではなく事務側への負担も非常に大きかった。今後は、本展で得た国際展の知見を館全体の共有知としてアーカイブすることで、海外作家とのやりとりを円滑に進められるようにしたい。</p> <p>・本展では複雑なシステムが組まれた映像プログラムやキネティックな作品を展示した。準備期間が短かったこともあり、展示期間中に機材トラブルが多数発生した。今後このようなテクノロジーを必要とする作品について余裕をもって準備を行い、期間中の機材トラブルへの対処法を事前に話し合った上で展示計画を決定したい。</p> <p>・映像作品が多い展覧会であったため、鑑賞時間の目安や映像作品のボリュームをウェブサイト等で事前に来場予定者に提示する必要があると感じた。</p>			
引継ぎ事項 (特記事項)	海外作家と契約する際は国ごとに源泉徴収税が大幅に変わるため、その金額を考慮して各作家との契約金額を決定する必要がある。				
コメント・意見	館長 副館長	年間ラインナップの中で、秋展として予算感の大きい国際的な展覧会となった。注目を集める東南アジア地域の作家による展覧会として、新しい価値観を提示する意義ある展示であった。一方、目標集客を大きく下回り、SNS・WEB・チラシ等リーチし閲覧された反応があったが、実際の集客に結びつかなかった。ひとつの展覧会のみで評価を行うべきではないが、原因を検証し今後に結びつける必要がある。			
	運営 評議会				